

中等社会系教科における環境問題を扱った授業構想 -ESD (Education for Sustainable Development) の視点から-

菊地 達八

1.論文構成

序章 問題の所在と研究の目的

第1節 問題の所在

第2節 研究の目的と方法

第3節 論文の概要

第1章 環境問題の類型化と環境教育・ESD
の歴史的背景

第1節 環境問題とは何か

第2節 環境教育・ESDの歴史的背景

第2章 中等社会系教科におけるESDの必要
性

第1節 ESDとは何か

第2節 学校教育におけるESDの枠組み

第3節 ESDにおける社会系教科の役割

第3章 中等社会系教科における環境問題を
扱った授業実践の検討

第1節 中等社会系教科における環境問題を
扱った授業実践の分析

第2節 中等社会系教科におけるESDの授
業実践の考察

第4章 中等社会系教科における環境問題を
扱ったESDの授業構想

第1節 題材設定と題材の扱い方

第2節 環境問題を扱ったESDの授業案

終章 本研究のまとめと今後の課題

第1節 本研究のまとめ

第2節 今後の課題

2.問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在

環境問題を扱ったESDの授業実践について、筆者が考える問題点を2点述べたい。

1点目は、ESDの実践において、従来の環境教育で指摘されていたことを踏まえた実践

が少ない点である。特に、井門正美氏が指摘しているように、「個人の心がけや行いに帰着させる実践やマクロな問題状況の提示だけに止まる実践が多くなった¹⁾」ことや岩田一彦氏が指摘しているように「身近な『心がけ』が地球規模の根本的環境問題解決につながっている保証がないにもかかわらず、『心がけ』で終始してしまう傾向にあることである²⁾」と従来の環境教育で指摘されたことが、現在ESDでも行われている³⁾。ESDでは「持続可能な社会」を目指す教育だからこそ、環境問題の原因となっている社会構造や仕組みに目を向け、よりよい社会を形成していく子どもを育む必要があると考える。

2点目は、ESDに限らず、環境問題を扱った授業実践では、個人の解決策を挙げただけで終始してしまう授業実践が多い点である。環境問題を扱う授業において、個人のライフスタイルに環境問題の原因があることが強調されるあまり、社会や経済における問題の構造を見逃してしまう。また、安易な個人の解決策の提示で実践が終始すれば、生徒が環境問題を現実的な問題として直面しない、うわべだけの授業になってしまう。そんな環境問題に対して、解決策が本当に効果的なのか、その政策に自分自身も賛成し参加していくことができるのかという現実的な問題として、環境政策を問い直したり、環境政策に対して意志決定したりする実践がなされる必要があると考える。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、中等社会系教科において、環境問題を構造的に捉えるESDの授業を構想することである。上記のような授業を構想

するにあたって、次のような方法をとる。

まず、環境問題の定義や歴史の変遷を追うことで環境問題の全体像をつかみ、環境問題の分類をおこなっていく。また、環境教育やESDの歴史的背景を整理する。次に、ESDとは何かについて、「持続可能な開発」を扱った国際的な議論について歴史の変遷をたどることで、明らかにしていきたい。そして、学校教育ではESDがどのように行われているのかについて述べ、その課題を提示したい。次に、環境問題の類型とESDの枠組みを用いて、環境問題を扱った授業実践を分析・考察し、その課題を提示したい。最後に、それらの課題を踏まえて、中等社会系教科の環境問題を扱った授業を構想する。

3.論文の概要

第1章では、環境問題の歴史を踏まえた上で、環境問題の類型化を行い、その環境問題を扱う環境教育とESDの歴史的背景を述べていった。第1節では、環境問題の歴史的背景を踏まえた上で、環境問題の類型化を行った。環境問題の歴史の変遷として、1970年代を境に加害・被害が不明確になってきたことや、1990年代において局地的であった環境問題が地球規模の地球環境問題が生じたという環境問題における転換期を示した。また、それだけでなく、近年では戦争による環境問題の被害も注目されていることを示した。以上の歴史の変遷を踏まえ、従来までの環境問題の類型化を構築し直し、筆者が戦争型という環境問題の枠組みを加えた新しい類型を示した。第2節では、環境教育の視点からESDの歴史的背景を探ることにより、環境教育が

国際的な議論の中で平和や開発といった様々な要素を含み扱われる内容の拡張の流れから、ESDが発生したことを述べた。

第2章では中等社会系教科においてESDの必要性を述べた。第1節では、まずESDとは何なのかについて、ESDの定義づけと環境教育との違いを示すことで、明らかにしていった。第1項では、ESDの系譜として「持続可能な開発」の概念の変遷を「持続可能な開発」に関する国際的な出来事から探った。その結果、「持続可能な開発」を「環境が地球規模から身近な地域までにわたって保全され、すべての人々が高い質の生活を享受し、将来世代にも継承することができる持続可能な社会構築のため、社会の基盤として環境保全とともに、経済的側面、社会的側面を統合的に向上すること」と定義した。第2項では、ESDの定義を各関係機関の定義を踏まえて、筆者が示した。「地球的な視野の下、社会の諸課題に対して身近な地域と結び付けながら、持続可能な社会の実現のために考え、行動していくことのできる人材を育む教育」と定義した。第3項ではESDと近接領域である環境教育との違いを示し、ESDの全体像を明らかにした。ESDの特徴は、3点あることを示した。1点目は、環境教育、開発教育、ESDの学習内容の比較から、環境教育に開発教育が加わった複合的な教育分野であることを示した。2点目は、ESD、環境教育、開発教育の各論者の主張から、地球的課題に対して、環境の観点だけでなく、社会や経済といった観点を捉える学習が重視されていることを示した。3点目は、ESD、環境教育、開発教育の各論者の主張から、子どもの能力や態度の育成を

重視していることを示した。第2節では、学校教育におけるESDの目標、内容、方法を踏まえて、課題点を2点述べた。1点目は、ESDで重視する能力・態度が多岐に渡り、各教科や領域の特質をいかしきれていない点である。現在、各学校に裁量を与えられている総合的な学習の時間では、多岐に渡るESDの能力・態度を育むことは困難である。だからこそ、中等社会系教科の特質を踏まえたESDで育むべき能力・態度を精選する必要があることを指摘した。2点目は、ESDで扱う内容が不明確であるせいで、ESDで扱われる内容が教師の主観に左右されてしまう点である。国立教育政策研究所によると、ESDの内容として、多様性・相互性・有限性・公平性・連携性・責任性の6つの内容を示しているが、これではESDで扱われるべき内容が不明確である。そのせいか、問題の所在で述べたような、社会の諸問題を扱わず、単なる世代間交流で終始してしまうESDの実践が後を絶たない。それでは、社会の諸課題に対して持続可能な社会の実現のために考え、行動していくことのできる人材を育むことができない。そのため、様々な社会の諸問題を学習内容として扱っていく必要があることを示した。第3節では、第2節の課題を踏まえて、中等社会系教科におけるESDの役割を示した。まず、学校教育におけるESDの課題の1点目については、社会科における評価規準を照らし合わせ、社会系教科の特質を踏まえたESDの能力・態度を精選した。その結果、つながりを尊重する態度、多面的総合的に考える力、批判的に考える力、進んで参加する態度の4つのESDの能力・態度に精選した。次に学

校教育におけるESDの課題の2点目については、内閣官房の『ESD実施計画⁴』を踏まえて、社会領域、環境領域、経済領域の3領域を示し、それらの諸問題を学習内容として扱うことを述べた。

第3章では、中等社会系教科における環境問題を扱った授業実践の分析を行った。第1節では、第1章で示した環境問題の類型や、第2章で示した中等社会系教科におけるESDで育むべき態度をもとに、環境問題を扱った授業の分析を行った。その結果、2点の課題点が明らかになった。1点目は、産業・公害型の環境問題や、戦争型の環境問題を扱った実践が少ない点である。その背景にはESDの内容として、地球上の諸課題を扱うことが重視されていることがあることが考えられる。しかし、産業・公害型や戦争型という環境問題は現在、先進国に限らず、発展途上国を中心に発生し続けている。そのような諸地域の環境問題を地球上の環境問題と密接に関わっている事実をESDの実践で取り扱っていく必要があると考える。そこで、第4章の授業構想時には、熱帯林の減少という地球環境型の環境問題を扱うことで、先進国の森林資源の輸入による森林破壊といった地球環境型を扱う視点だけでなく、発展途上国内の林産業の振興と森林破壊という諸地域の産業・公害型の環境問題の視点を加えていく。2点目は、ESDで育む能力・態度が単元全体でバランスよく構成されていない点である。筆者が取り上げた社会系教科の特質を踏まえたESDの4つの観点を単元全体で構成した実践は13実践中、1件しか見られなかった。そこで、第4章の授業構想時には、その4つの観点を単

元全体で構成する。次に、第2節では、環境問題を構造的に捉えた実践を行い、安易な解決策の提示で終始せず、解決策を検討し、解決策実行へつなげていく授業実践である永田成文氏の実践を分析した。評価する点として、前述したように、解決策の検討や意思決定にまで踏み込んだ実践で社会参画の態度を意識した授業構成になっている点が挙げられる。課題点として、地球温暖化のメカニズムや影響について扱っているが、それらが社会や経済とどのように関わっているのかという問題の構造を扱う授業時間が少ない点である。それでは、社会系教科で環境問題を取り扱う意義が少ないものになってしまう。そのため、永田氏の地球環境問題の原因を捉える段階では、環境問題を複雑にしている社会や経済を多面的に考察させるような授業が必要になると筆者は考える。そこで、第4章では、問題の構造を環境だけでなく、社会や経済の観点から捉えた上で、解決策を検討、意思決定していく授業を構想していく。

第4章では、ESDの観点から、高等学校の地理Aの「熱帯林の減少」という単元で筆者の環境問題を扱った授業を構想した。

4. 今後の課題

本節では、今後の課題について4点述べていく。まず、1点目は開発教育に関する研究が少なかった点である。ESDは、環境教育に開発教育が加わった教育であると述べたが、本論文では環境教育を中心に論じていったため、開発教育についての研究が少なかった。そのため、ESDが扱うべき内容について、より具体的な学習内容の提示まで至らなかったことが課題点として挙げられる。そのため、

実際にESDの学習内容が中等社会系教科学習指導要領のどんな内容に位置づけられ、構成が可能なのかについて深めていく必要がある。2点目は、ESDは他の教科との連携を重視している教育であるが、本論文では中等社会系教科に限定してでしか論じることができなかった点である。ESDは他の教科でも行われており、他の教科それぞれの特質を生かした実践の連携こそが、充実したESDとなりえるだろう。そのため、他の教科と社会系教科との連携についても研究の余地があり、今後の課題であると言える。3点目は、環境問題の戦争型を扱う授業を構築することができなかった点である。授業実践分析の際、戦争型を扱う実践がほとんど見受けられなかった。そこで、戦争型の環境問題を扱うことで、地理や公民だけでなく、歴史というアプローチで、戦争が環境問題に大きな悪影響を及ぼす実践を構築したいと考える。4点目は、環境問題を扱ったESDの授業構想に留まり、授業を実践することができなかった点である。

以上の点を踏まえて、よりよい環境問題を扱ったESDの授業実践を模索していきたい。

1 井門正美著「環境問題と環境教育」『国際社会科学研究 創刊号』（国際社会科学研究フォーラム、1997年）69頁引用。

2 岩田一彦著「経済の視点なくして社会科が成立するか」『社会科教育』（明治図書、2008年）104～105頁参照。

3 ユネスコ・アジア文化センター編著『ひろがりつながるESD実践事例48』（ユネスコ・アジア文化センター、2011年）では中学校と高等学校合わせた27件の実践中、体験活動だけで終始せず、社会の諸問題を取り上げている実践は10件程度であった。

4 内閣官房『ESD実施計画』

<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/esd/suishin.html>